

## 2 平成30年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査結果

### 1 調査の目的

- (1) 子供の体力・運動能力等の状況に鑑み、国が全国的な子供の体力・運動能力の状況を把握・分析することにより、子供の体力・運動能力の向上に係る施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- (2) 各教育委員会、各国公立学校が全国的な状況との関係において自らの子供の体力・運動能力の向上に係る施策の成果と課題を把握し、その改善を図るとともに、そのような取組を通じて、子供の体力・運動能力の向上に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。
- (3) 各国公立学校が各児童生徒の体力・運動能力や運動習慣、生活習慣、食習慣等を把握し、学校における体育・健康等に関する指導などの改善に役立てる。

### 2 調査の対象とする児童生徒

国・公・私立学校の以下の学年の原則として全児童生徒を対象。

- (1) 小学校調査  
小学校、義務教育学校前期課程及び特別支援学校小学部の第5学年
- (2) 中学校調査  
中学校、義務教育学校後期課程中等教育学校前期課程及び特別支援学校中学部の2年生  
ただし、特別支援学校及び小中学校の特別支援学級に在籍している児童生徒については、その障害の状態等を考慮して、参加の是非を適切に判断。

### 3 調査事項

- (1) 児童生徒に対する調査
  - ア 実技に関する調査（測定方法等は新体力テストと同様）  
[8種目] 握力、上体起こし、長座体前屈、反復横とび、20mシャトルラン、50m走、立ち幅とび、ソフトボール投げ（中学校はハンドボール投げ）  
（※中学校は、持久走か20mシャトルランのどちらかを選択）
  - イ 質問紙調査  
・運動習慣、生活習慣等に関する質問紙調査
- (2) 学校に対する質問紙調査  
・子供の体力・運動能力等の向上に係る取組等に関する質問紙調査
- (3) 教育委員会に対する質問紙調査  
・子供の体力・運動能力等の向上に係る施策等に関する質問紙調査

### 4 調査実施日

- (1) 実技調査実施期間：平成30年4月から7月末までの期間
- (2) 児童生徒質問紙調査：調査票到着から7月末までの期間
- (3) 学校質問紙調査：調査票到着から7月末までの期間

### 5 調査校数（国立・公立、私立）

30,766校（小学校20,121校、中学校10,645校）

### 6 大分県児童生徒の状況

#### (1) 調査校数・児童生徒数（公立）

- ① 小学校（254校、男子5,029名、女子4,753名：特別支援学校含む）
- ② 中学校（125校、男子4,420名、女子4,206名：特別支援学校含む）

**(2) 体力合計点による全国順位【資料1】**

- ① 小学校5年男子 1位 (九州1位) (参考H20:32位)
- ② 小学校5年女子 3位 (九州1位) (参考H20:40位)
- ③ 中学校2年男子 6位 (九州1位) (参考H20:39位)
- ④ 中学校2年女子 8位 (九州1位) (参考H20:43位)

**(3) 全国平均以上の項目数(8項目中)【資料2】【資料3】**

- ① 小学校5年男子 8 (H29:8)
- ② 小学校5年女子 8 (H29:8)
- ③ 中学校2年男子 8 (H29:8)
- ④ 中学校2年女子 8 (H29:5)

※中学校はシャトルランか持久走のどちらかを  
選択(持久走選択者がいる学校は、19校)  
※持久走の選択者  
男子:249名(全生徒数の5.6%)  
女子:222名(全生徒数の5.3%)

**(4) 各調査項目の結果【資料2】【資料3】**

- ① 小5男女は、全項目で全国平均を上回り、体力合計点も過去最高値(H20の調査開始以降、以下同じ)となった。
- ② 小5男子は8項目中6項目、小5女子は8項目中7項目で過去最高値となった。
  - ・小5男子:上体起こし、長座体前屈、反復横とび、シャトルラン、50m走、立ち幅とび
  - ・小5女子:ソフトボール投げを除く7項目
- ③ 中2男子は9項目中6項目、中2女子は9項目中8項目で過去最高値となった。
  - ・中2男子:上体起こし、長座体前屈、反復横とび、50m走、立ち幅とび、ハンドボール投げ
  - ・中2女子:上体起こし、シャトルランが初めて全国平均を上回った。

**(5) 体力総合評価【資料4】**

- ① 総合評価がC以上の児童生徒の割合は、小・中学生男女全て全国平均を上回り、過去最高値となった。(県長期総合計画・県長期教育計画のH36目標指標を達成)

**(6) 児童生徒質問紙による調査結果【資料5】【資料6】**

- ① 1週間あたりの運動実施時間は、小5男女・中2男子が全国平均を上回った。中2女子は、過去最高値となった。
- ② 1週間あたりの総運動時間60分未満の割合は、小・中学生男女すべて全国平均を下回り、小5男女、中2女子が過去最低値となった。
  - (1) 小5男子 5.8%(全国7.2%)
  - (2) 小5女子 10.0%(全国13.2%)
  - (3) 中2男子 4.6%(全国6.5%)
  - (4) 中2女子 13.5%(全国19.4%)
- ③ 運動やスポーツへの愛好度は、「好き」「やや好き」と回答した割合が、小5女子が全国平均を下回るなど、小・中学生男女ともに平成26年度頃から割合が増えていない。

**(7) 学校質問紙による調査結果【資料7】**

- ① 小・中学校とともに、「学校全体で体力・運動能力向上の目標設定」「運動が苦手な子、性別に応じた体力向上の取組」「調査結果を踏まえた授業等の工夫・改善」「体力・運動能力向上に関する取組、授業における指導方法の工夫・改善についての教職員の関わり方」「家庭へ体力向上に係る説明・呼びかけ」の項目で全国平均を10ポイント以上上回った。
- ② 中学校においては、「保健体育の授業以外で体力・運動能力向上の取組」が全国平均を20ポイント上回った。

## 7 考察

### (1) 成果とその分析

- ① 「体力合計点による全国順位」や「各調査項目の結果」などから、本県児童生徒の体力・運動能力は確実に向上している。
- ② 総合評価がD、又はEの児童生徒の割合は減少しており、全体的な体力の底上げが図られていると判断できる。
- ③ 平成25年度から始めた学校全体で組織的・計画的に取り組む「一校一実践」や、小学校体育専科教員・中学校体力向上推進校による体育・保健体育授業改善などが浸透してきていることが、体力向上につながっていると考えられる。

### (1) 課題及び今後に向けて

- ① 調査項目について、小学生男子の握力、小学生男女のソフトボール投げが、過去最高値に達していない。児童の体力の実態に沿った取り組みを行う必要がある。
- ② 「生徒の体力・運動能力の向上に関する取組、保健体育の授業における指導方法の工夫・改善についての教職員の関わり方」について、「全教職員で関わっている」と回答する中学校の割合が低い。「一校一実践」等、組織的・継続的に行うための工夫が必要である。
- ③ 「1週間の総運動時間60分未満の割合」は減少傾向にあるものの、小・中ともに女子の割合が高い。運動の喜びや楽しさを喚起する取組を推進していくことにより、「1週間の総運動時間60分未満の割合」を今後さらに減少させていきたい。
- ④ 「運動やスポーツへの愛好度の割合」が、小・中学生男女ともに平成26年度頃から増えていない。運動やスポーツが苦手・嫌いと感じている児童生徒にも「わかる」「できる」「たのしい」授業や活動を推進し、生涯にわたって運動やスポーツに親しむ資質・能力を育んでいきたい。